

平成二十八年 度

国

語

(A日程)

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は旅に出る前、自分の震災経験を伝えられたらそれでいいと思っていました。しかしいくつかの大学を回り、学生にとって意味ある講演にするために、原発の話は必須だと考えるようになりました。地震や津波の話も大事ですが、世界が求めているのは原発の情報で、この問題を避けては通れないと思ったのです。英語で原発や放射能について話すことはとても難しい。でも、世界の学生とこの問題について話してみたいと思い、チャレンジしました。

正直言つて、私は原発について知らないことだらけでした。

A、大学には福島県出身で原発や放射能に詳しく、現在も

様々な活動が続いている友人がいます。彼とは、私が世界を旅する前に石巻や南三陸、大船渡に一緒に行つて、現地の人に話を聞きに行ったりしていました。私が旅に出てからも、スカイプで密に連絡を取り合っていました。事故当時どんなことを思ったかを聞いたり、今の福島状況や、読んでおくべき資料など、たくさんのことを教えてもらっていたのです。

私は原発に賛成でも反対でもありません。日本の生活は、電気のおかげでも快適。これだけ原発への依存度が高い日本が原発を廃止してしまつたら、多くの弊害が出ることは明らかです。私は「賛成」「反対」と言う前に、どれだけ電気の使用量を減らす生活をしていくのか、そしてそれは本当に可能なのか。電気はいつたいどれだけ必要で、どれくらい減らせるものなのか。それらをしっかりと考えることから始めなければいけないと思っています。

それらをふまえ、質疑応答の際に聞いてみました。

「日本の技術を使ってインドに原発ができるとしたら、どう思いますか？」

福島の事故は原発を作る技術が悪かつたのではなく、施設管理に問題がありました。それでも、あれほどの事故を起こした原発を日本は輸出しようとしている。その技術がインドに行くとしたら、彼らはどう思うのでしょうか。純粹に聞いてみたいと思いました。

私の質問に対し、インドの学生たちは口々に言いました。

「³いいに決まつてるでしょう！」

「最高だよ、それは」

思いがけない反応に、びっくりしました。

私のそのひと言が、彼らをカチンとさせてしまったようです。一人の学生が立ちあがって言いました。

「日本人や先進国の人たちは、インドに電気がないとか、インフラが整っていないと笑うくせに、勝手に事故を起こして原発をよくないものと決めつけて、原発反対ってどういうことなんだ？」

確かに多くのバックパッカーが、「インドは何もないからおもしろい」とか「インドに行くとなんか大事なことに気づかされるよ」と言います。電気や水道などインフラが整っていないことを、おもしろい体験として語りたがる。それは、自分たちが旅行者だからです。

しかし、インドの学生たちはここで毎日生活していて、電気がないのは死活問題で、自分たちの力で心から変えていきたいと思っている。そして、電気を安定して使えるようにするためには、安価な原発が必要だと考えていました。

日本には、現在動いていないとはいえ54基^きの原発があります。

B、インドはこの広大な国土に5基です。これからの発展にはどうしても電気が必要なのに、勝手に原発事故を起こされ、原発は悪いものだ^もと決めつけられて、反対されたらカチンとくるのは当たり前かもしれません。

「日本はあれだけの問題を起こして、原発をやめたいと言ってるくせに、結局24時間電気がないと生活できないじゃないか」

すごい勢いで食ってかかられました。でもその通りなので、私は何も言えませんでした。ガヤガヤと議論がおさまらなくなり、申し訳なくて言葉を探していたら、別の学生が言いました。

「もういいだろう。やめておけよ。この人は原発の議論をしにきたわけじゃなくて、感謝の気持ちを伝えに来てくれたんだから」
彼にその場をなんとかおさめてもらいましたが、私はとても複雑でした。インドをなめていたわけではないし、伝えたいという気持ちは本当だった。でも、こういう反応に対処⁵できない自分は甘^{あま}かったです。日本人代表として矢面^{やおもて}に立たされ、何も言えないことがみじめでした。こうなつて初めて「本当に理解し合うとは、どういうことか」が理解できた気がしました。

国の考えなどではなく、そこに暮らす学生一人ひとりがどんな状況に置かれていて、どういう気持ちで国に貢献^{こうけん}しようと思っていて、その熱意がどこに向かっているのか。そこまで実感できないと、同世代の人たちに会う意味がありません。そして私自身も、正論やきれいごとではなく、難しくてきちんと学んで、自分の頭で考えて、素直^{すなお}な気持ちを伝えたいと思いました。

日本で暮らしているだけでは、決して感じられなかったことでした。

問一

☐ A・Bに共通して入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たとえ イ つまり ウ しかし エ しかも オ または

問二

——線1「この問題」とありますが、何についての問題ですか。説明しなさい。

問三

——線2「私は原発に賛成でも反対でもありません」とありますが、筆者の考えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「賛成」「反対」のどちらの意見もあってよいが、重要な問題なので、自らの発言に対してはきちんと責任を持たなければならぬ。

イ 「賛成」「反対」を議論する前に、今回の事故のことを詳しく調べ、復興を優先して東北の人々の暮らしを取り戻していく必要がある。

ウ 「賛成」「反対」のどちらかに決めるのではなく、みんなで立場を越えてこれからの日本をどうしていくかを話し合わなければならない。

エ 「賛成」「反対」を考える前に、電気がどれだけ必要で、どれくらい電気の使用量を減らす生活が可能なのかを考える必要がある。

オ 「賛成」「反対」を自分だけで決めるのではなく事故についての情報を世界に発信し、多くの国の人々と議論を深めなければならない。

問四 — 線3「いいに決まってるでしょう」とありますが、インドの学生たちがこのように言ったのはなぜですか。最も適

当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 電気を安定して使えるようにするためには、安価な原発がぜひとも必要だと考えているから。

イ 原発事故を起こした日本人が、原発を悪いものだと思いつけることに反感を抱いているから。

ウ 原発事故の正しい情報が伝わっておらず、原発の良いところばかりが注目されているから。

エ 国家がエネルギー政策として、原発によって電気を安定して作り出すことに積極的だから。

オ 日本の技術を完全に信頼しており、今後原発で事故が起ることはないと思信しているから。

問五 — 線4「本当に？」とありますが、筆者がこのように思ったのはなぜですか。四十文字以内で説明しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問六 日本人の旅行者の多くはインドのどういうことをおもしろいと感じていますか。本文中から二十文字で抜き出しなさい。

問七 — 線5「本当に理解し合う」とありますが、どういうことですか。六十五文字以内で説明しなさい。

【二】 中学一年生の陽介は、父親の突然の死により、母と小学一年生の妹、陽菜の三人暮らしを始めた。働き始めた母に代わり、陽菜の面倒を見るため、陽介は中学では美術部に入った。よく読んで、後の問いに答えなさい。

「えー、なんで!？」

「オレはいいよ」

「陽介好きじゃん、サッカー。タダだよ、タダ」

「オレは観るよりするほうが好きなの。中野でも誘ってやればいいだろ。あいつ観るの好きだし」

「えー」

J-1の試合のチケットを親戚からもらったといつて、あつちゃんが朝、ハイテンションで教室に入ってきた。
一瞬、気持ちが浮きたった。でも、あつちゃんがかざしたチケットを見て、それはあつさりしぽんだ。

6・18(土) 16:00 KICK OFF

無理だ。行けない。

土曜はかあちゃんがない。学童クラブも休みだ。

「なんで!？」

「べつに」

オレの返事に、あつちゃんの表情が曇った。

「なんだよお、せっかくもらったのに」

「オレはいいからさ。な、だれかと行けよ」

午後四時キックオフってことは、二時とか遅くたって三時には出けなきゃならない。昼からかあちゃんが帰ってくるまで、陽菜をひとりにするなんて、できるわけがない。

「わりい」

ボソリというと、あつちゃんは「いいよ」と、すこし怒ったように言つて、オレの席をはなれた。

教室のうしろから、金子! と呼ぶあつちゃんの声が聞こえてきた。金子もそういえば、サッカー好きだったんだっけ。

その日一日、あつちゃんは話しかけてこなかった。

妹がひとりになっちゃうから、その日は行けない。そう断ればよかったのかもしれない。そうしたら、あつちゃんだって、わかってくれたと思う。そつかあと、大変だなと言ってくれたかもしれない。

でも、オレは、そんなふうに思われるのがイヤだった。同情されるのも、気まずい思いをさせるのも、イヤだった。だから、本当のことは言えなかった。

校舎を出るとき、サッカー部の一年がボールをいくつも入れたネットを担いで、オレの横を走りぬけていった。そのうしろ姿をじつと見ている自分に気づいて、小さく舌を打った。

すこし早めに学童クラブに迎えにいくと、陽菜が飛び出してきた。

「もーちよつとあそんでいいでしょ！」

「えっ？」

「五時まで。陽菜、ゆうなちゃんといっしょに帰るから、大丈夫だよ。じゃーね。あ、おにーちゃん、陽菜ね、こんどの土曜日、ほのかちゃんのお誕生日パーティーにお呼ばれたんだ！ おひるごはんも食べるんだよ。いっぱいごちそう出るんだって」

陽菜はそれだけ言うと、ぱっと部屋のなかにもどってしまった。

なんなんだよ、それ……。

「せつかくお迎えにきてくれたのにごめんなさいね」

長瀬さんが苦笑する。

「いえ」

「同じ方向のお友だちがいるから大丈夫よ。五時には帰るように言いますからね」

お願いしますと口のなかでつぶやくように言って、学童クラブを出た。

大きく息をすいこんで空を見あげる。やわらかくなってきた風が、首もとにからみつく。どこから流れてくるカレーのにおいに、A がしめつけられた。

カレーは、とうちゃんが唯一つくれる料理だった。大きなジャガイモに、すこし堅めのニンジン。お世辞にもうまいとは言えなかったけど、とうちゃんがカレーをつくった日は、かならず家族四人で食卓をかこんだ。

³奥^{おく}歯^ばをぎりりと噛^かみしめる。
もう……イヤだ。

やたら張りきって仕事をしているかあちゃんも、友だちと楽しそうにあそぶ陽菜も。

オレががんばるんだと思ってきた。かあちゃんも、陽菜も、オレが守るんだと思ってきた。なのに。

気づいたら、ふたりとも顔をあげて前へ前へと進んでいる。進めていないのは、オレだけだ。

かあちゃんに心配をかけたくなかった。陽菜にもうさみしい思いをさせたくなかった。

けど、けど、もうイヤだ。

イヤだ、イヤだ！

家に帰ると、布団^{ふとん}にもぐりこんだ。

翌朝、早くに目がさめた。

かあちゃん起きるまでには、まだ一時間はある。そと布団を出て台所へ行くと、窓の外はもう明るかった。外に出て湿^{しめ}り気をふくんだ朝の空気を思いきりすいこむ。うーんと大きくのびをすると、からだがすこし軽くなった気がした。

「陽介」

ふりむくと、かあちゃんがパジャマにカーディガンを羽織^{はね}って玄関^{げんかん}の前に立っていた。

「背、またのびたね」

「そう、かな」

かあちゃんは、うん、とうなずいた。

「かあちゃんのこと、怒^{いか}ってる？」

「……べつに。なんで」

「だって」

「……」

「仕事の
B をぬくわけにいかないの。こんな時代だもん、正社員っていったって、いつクビをきられるかわからないし。」

陽菜の誕生日を忘れちゃったのは悪かったと思ってる。本当にうつかりしてた。ごめん。でもね、ほかのことは、かあちゃんあやまらないよ」

かあちゃんはオレをまっすぐに見た。

「いまね、かあちゃんがしなきゃならないのは、あんたたちを育てていくことだもん。ちゃんと食べさせて、学校に行かせて。堂々と胸を張って。だからみんなと同じように残業もする。そのうち資格も取る。そう決めたの」

「決めたって」

「前と比べたら、してやれないことはいろいろあると思う。ううん、あるの。絶対。でもね、できないことを⁴しかなない⁵ってあきらめるんじゃないかって、いま大事だと思⁴うことを、かあちゃんは自分で選^{せん}択^{たく}したの。選んだの」

「選んだ？」

キーツという自転車のブレーキ音が、なまあたにかい風にのって通りのほうから聞こえた。

「そうよ。選んだの。がんばって働いて、三人で暮らす。いっしょにごはんを食べられなかったり、話を聞いてやれない日もあるし、帰りが遅くてさみしいかもしれないけど、ガマンしてもらおう」

「でも」

かあちゃん、陽菜はまだ小一だよ。友だちができたっていったって、まだ一年生だ。とうちゃんもいなくて、かあちゃんもいなかったら……。残業なんて、できないって言えばいいじゃん。資格なんてどーでもいいじゃん。

「オレの帰りが遅かったら、陽菜のヤツ、ひとりで待ってなきゃならないじゃん」

「そうよ」

「心配じゃないのかよ！ いいのかよ、それで」

「いいとか悪いじゃないの。それが、これからのうちのなの」

「なら、いちいちそんな話しないでいいよ。意味ないじゃん！」

「知ってもらいたかったから。しかたなくそうなっちゃったってわけじゃないってこと」

「わけわかんねーって」

目の前の階段をカコン！ と蹴^ける。

「陽介。陽介にも、ちゃんと自分で選んでほしい。うちがこうだから、こうしなきゃならないって、そんなふうに考えてほしくない」⁵

「なにをだよ」

「……部活のことだって、そうでしょ。サッカーやるんじゃないの？」

「だっ」

⁶ だって、ということばを飲みこんだ。「だって、陽菜がかわいそうだから」。ことばにしたら、きつとそんなふうが続いてしまう。けど、もしもオレが陽菜だったら、もしもそんなふうに言われたら、たまらない。

「あきらめるんじゃないくて、選ぶの。考えて、ちゃんと自分で」

そう言って、かあちゃんはオレの手をにぎった。細い長い指、かあちゃんの手は、前と今にも変わらなかった。

(出典 いとうみく『空へ』小峰書店による)

問一

☐ A・Bに入る言葉として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 口 イ 胸 ウ 頭 エ 足 オ 手 カ 腹

問二

線1「それはあつさりしぼんだ」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア J1の試合観戦に誘われたことで、サッカーを観るよりもするほうが好きだと改めて気がついたということ。

イ J1の試合観戦を楽しみにしていたが、好きなチームの試合でないことを知り、興味がなくなったということ。

ウ J1の試合観戦がタダでできることを喜んだが、何か裏があるにちがいないと疑いはじめたということ。

エ J1の試合観戦に行きたかったが、あっちゃん一人分のチケットしかないを知り、憎らしく思ったということ。

オ J1の試合観戦ができると興奮したが、日時を知って観戦は無理だと判断し、がっかりしたということ。

問三

線2「本当のことは言えなかった」とありますが、なぜですか。「ーから。」に続くように本文中から二十五字程度で抜き出さない。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問四

——線3「もう……イヤだ」とありますが、どのようなことに対する思いですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かあちゃんも陽菜も自分ががんばって守るのだと思ってきたが、そんな自分の気持ちにさらに甘えて二人が好き勝手なことばかりするということ。

イ かあちゃんも陽菜も気づいたら未来に向かって生きていて、自分だけが二人を守るという思いにとらわれて立ち止まってしまっているということ。

ウ かあちゃんも陽菜も未来に向かって生きていくことに必死で、前を向けず過去に留まってしまっている自分を二人が助けてくれないということ。

エ かあちゃんも陽菜も好きに生きられるのは自分ががんばって守ってあげているからなのに、二人ともそのことに感謝してくれないということ。

オ かあちゃんも陽菜も未来に向かって生きようとするあまり、二人ともとうちゃんのことを忘れてしまったかのように振るまっているということ。

問五

——線4「いま大事だと思うこと」とありますが、どういうことを大事だと思っているのですか。説明しなさい。

問六

——線5「うちがこうだから、こうしなきゃならない」とありますが、具体的にどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父が死んで母が働くことになり、まだ小一の妹は幼くて家の手伝いができないので、家のことを自分一人で引き受けなければならないということ。

イ 父が死んで母が働くことになったのに、まだ小一の妹はわがままを言うので、やりたいことをすべてがまんしなければならないということ。

ウ 父が死んで母が働くことになったが、母が資格を取ることに夢中になりすぎるあまり、家のことをすべてやらなければならないということ。

エ 父が死んで母が働くことになり、小一の妹をひとりにするわけにはいかないから、やりたかったサッカーをあきらめなければならないということ。

オ 父が死んで母が働くことになったせいで、勉強や部活動を後回しにして、小一の妹の送り迎えをすべて一人でやらなくてはならないということ。

問七

——線6「だって、ということばを飲みこんだ」とありますが、陽介がことばを飲みこんだのはなぜですか。六十五字以内で説明しなさい。

問八

本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 陽菜は、母が仕事で家にいないことが多いので、いつも寂しい思いを抱えている。

イ 母は、陽介に自分がしたいことを考えて自分の意志で選んでほしいと思っている。

ウ 陽介は、母の仕事に対する思いを聞き、だんだんと応援する気持ちおうえんになっている。

エ あっちゃんは陽介の家庭の事情を知って、なるべく陽介を助けようと思っている。

オ 学童保育の長瀬さんは、陽菜のわがままを聞き入れてしまう陽介にあきれている。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 小鳥がナナいている。
- ② 地域の人々とコウリュウする。
- ③ 卒業式に家族でサンレツする。
- ④ 次のシユクジツに出かけよう。
- ⑤ この料理はゼツピンだ。

問二 次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 思考をめぐらせる。
- ② 親に逆サカらってはいけない。
- ③ バスの停留所。
- ④ 連絡事項を追記した。
- ⑤ 雨戸をあける。

問三 次の——線部の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

① 暗がりの中で足がすくむ。

- ア 疲れて痛くなる
- イ 自由に動かなくなる
- ウ かるやかに動く
- エ ぶるぶる震える
- オ 何かに引つ張られる

② 地方へも手を広げて店を出す。

- ア 準備をして
- イ 力を借りて
- ウ 範囲を大きくして
- エ 候補を探して
- オ 無理をして

③ 彼は^{かれ}温和な性格だ。

- ア おだやかでおとなしい
- イ やさしくてよくしゃべる
- ウ あまり口を開かない
- エ 熱心に世話を焼く
- オ 何事も他人に合わせる

問四 次の各文には誤った文字が使われています。その文字を抜き出し、正しい漢字に直しなさい。

① 警察官は市民の生活の安全を守るという、使名を持っている。

② 文部化学省から全国の小学校に、作文コンクールの案内が送られた。

